



# ど真ん中を生きる

永田円了

## Sacred Contracts

人生が輝く時とは、どういう時であろうか。宝くじで大当たりした時か。それとも、出世して皆に承認された時か。本当に輝くときとは、本来の自分が発揮できた時ではなかろうか。自分の“ど真ん中”が活動したとき、その時こそ魂レベルで人生の輝きを味わることができるのではなかろうか。

### 聖なる契約

「誰しも“聖なる契約”をもってこの世に生まれ出る」「その契約を果たすことで、あなたはど真ん中を生きることができるのです」と、キャロライン・メイス（米国直観医療第一人者、神学博士）は言う（『第8のチャクラ』より）。聖なる契約とは、生を授かったこの世において、果たすべき約束、課題のこと。そこには多くの「個別の契約」があり、それに従って特定の時期に特定の場所で、特定の人に出会い、お互い影響し合って生きる。

全ての体験は、自分を成長させ、生き方を聖なる契約に向かって進むためのキッカケであると考え。聖なる契約に気づく時、正しくないことをすると、何となく分かる感覚。内なる声は良心を通して語りかけてくる。

### 自分の人生に“偶然”に登場する人はいない

人生を歩むとき、多くの人に出会う。会えて嬉しかった人、心をときめかす人、ずっと一緒にいたい人。逆に、会いたくなかった人、つまらない人など、人生に登場する配役は様々である。聖なる契約の視点からみると、この出会う人たち全てが、自分がこの地上で学び、意識の深みに降りていくための仕掛けであると考え。



家族、友人、恋人、親しい同僚、あるいは敵だと思ふような人さえ、自分がこの世で学び、成長し、“ど真ん中を生きる”本来の自分にたどり着くためのプロセスである、とキャロリン・メイスは言う。

人生で最も多く学べる相手とは「小暴君」である、と米国作家・人類学者、カルロス・カスタネダは言う。一見、理由もなく私たちにいらつかせ、自分自身の一番嫌な面を見せつけられる相手。自分にとっては嫌な悪役といわれる人からも、多くを学ぶことができるというのである。

### 物事を抽象的に捉える

天使は言った：事が起こったとき、狭い心は、事を起こした犯人捜しをする。平凡な心は、そのことのみを調査する。広い心は、事のウラに潜むメッセージを探す。

白雪姫のストーリーでは、「鏡よ鏡、この世で一番美しいのは誰？」と尋ねる女王。鏡は自分自身の象徴として見る。「一番美しいのは白雪姫」と聞いて激怒する女王。支配欲に囚われた自我である。また、床掃除をする白雪姫は、最も凡庸な作業にすら安らぎと満足感をもつ‘高次の自己’として捉えることができる。

無意識世界を支配する自我（エゴ）は、自らの存在を知らしめるために、高次の自己を抹殺しようとする。私たちが“ど真ん中を生きる”（＝高次の自己を生きる）にあたって、最も強固な壁となって現れる。実は、こういうことが、私たちの心の中で日々繰り広げられているのである。

#### 事例

キャロライン・メイス著『Sacred Contracts』聖なる契約  
 左手のピアニスト、舘野泉／脳溢血で右半身が不随に  
 佐野洋子著『100万回生きたねこ』／ど真ん中をみつげるために  
 白雪姫／物事を抽象的に捉える視点の事例として  
 「小暴君」／嫌な奴だけど、人生で最も多く学べる相手  
 シャーリー・マックレーン／悪者から学ぶ  
 夏目漱石著『三四郎』／日本より頭の中の方が広いでしょう  
 米映画『ザ・ボーダー』／ど真ん中を生きる男の顔  
 米映画『クロッシングデイ』／女性は自分を男のど真ん中に置きたい  
 黒澤明『わが青春に悔いなし』／女性のど真ん中とは、  
 「二十歳の肌にして！」／エステ WAM のコマーシャル  
 囲碁棋士九段・安田泰敏／ど真ん中を生きる  
 歌・Climb Every Mountain 山を越えて／『The Sound of Music』より

